1. 大きく話題となった「青森県 ねぶた」企画
2.「徳島県 藍」企画。巨大な暖簾のインスタレーションは圧巻だ
3.「くずはモール」で「高知県 組子」を再活用した装飾も展開

企業紹介
Sustainable Development Goals and Gift

地域の伝統工芸・産業・文化とコラボした装飾を展開 再活用や他社への貸与も行う「松屋の地域共創プロジェクト」

松屋銀座

松屋銀座では2020年から「松屋の地域共創プロジェクト」を進めている。

日本各地で継承されている様々な伝統工芸・産業・文化とコラボした店内装飾を実施。またそれらを自社・他社で再活用することで装飾物の廃棄を減らし、コスト削減も実現。さらに他社にも巡回することで地域共創を促すとともにSDGsの具現化を追求する取り組みだ。

最初に取り組んだのは20年12月のクリスマス企画だ。「つながり」をテーマに国内屈指の生産量を誇る福井県のリボンと、アートユニット「RIBBONESIA」の作品のコラボで美しい世界観を表現した。地域支援にもつながる取り組みだ。

同年12月から翌年1月にかけては徳島県上板町を拠点とする新世代の藍師・染師集団「BUAISOU」とコラボし「徳島県 藍」企画を実施。巨大な暖簾のインスタレーションは話題となり、日本空間デザイン賞2021「銀賞」、「サステナブル空間賞」も受賞した。

21年2月のバレンタインデー時期には「高知県 組子」のインスタレーションを展開。組子の需要が減少する現状を変えるべく、高知県「土佐組子」を立ち上げた岩本大輔氏とのコラボ企画だ。

なお同年7月の夏のプロモーションでは「組子」素材を再活用した企画も展開している。

さらに21年12月には京阪ホールディングスが「くずはモール」などで「組子」を再活用した装飾も実施。その他、金沢都市開発「香林坊 アトリオ」や「大和富山店」でも装飾素材を再活用するなど、他社への有償貸与も進む。

昨年、大きく話題になったのが12月の「青森県 ねぶた」企画だ。コロナ禍でねぶた祭りの中止が余儀なくされている中で、女性初のねぶた師である北村麻子氏に総数35点のねぶたを依頼。多幸感あふれるねぶたがクリスマスを彩った。Christmas2021 銀座ディスプレイコンテスト2021「日本空間デザイン協会賞」「銀座通連合会優秀賞」受賞。この企画に感銘を受けた創作和菓子の宗家 源吉兆庵からの依頼で、22年4月にはねぶたを使用した装飾プランを提案・実施している。

こうした取り組みはSNSでも話題となり、松屋公式インスタグラムのフォロワー数も急伸している。

「社会的に意味のある装飾がお客様から支持される時代になってきています。日本の各地には魅力のある伝統工芸や産業、文化が数多くありますから、その魅力を今後も発掘し、この銀座の街から海外に向けても発信していけたらと考えています」（㈱松屋 共創事業部 IPクリエイション課長 柴田亨一郎氏）